

【論文】

中国語の介詞“对”¹⁾と 日本語の複合格助詞「に対して」²⁾

馬 小 兵

The Chinese Preposition “Dui” and the Japanese Complex Postpositional Particle “Nitaishite”

MA Xiaobing

要旨：

本稿主要论述汉语介词“对”和日语复合格助词「に対して」之间的对应关系。

本稿把由汉语介词“对”或者日语复合格助词「に対して」构成的句子中的主语、“对”的介词宾语或者「に対して」的前置名词、谓语句（包括形容词谓语句和名词谓语句）等的构成、以及“对”的介词宾语或者「に対して」的前置名词同句子的谓语之间的关联作为比较的要点，首先，对于汉语介词“对”和日语复合格助词「に対して」的用法进行了分类；其次，针对“对”和「に対して」的各个用法，分析了其句法上和意义上的特点；最后，归纳总结了汉语介词“对”和日语复合格助词「に対して」的对应关系。

キーワード：“对”の賓語、「に対して」に先行する名詞、文の主語、述語の種類、対応関係

1. “对”と「に対して」の意味

中国語の介詞“对”（dui）は、呂叔湘編（1980）では、“1. 指示动作的对象；2. 表示对待。”（p157）「1. 動作の対象を示す；2. 対処を表す」と説明され、劉月華他（1983）では、“引进行为动作的对象或关系者。”（p163）

「行為、動作の対象または関係を持つものを導入する」と説明されている。

一方、日本語の複合格助詞「に対して」は、『日本語教育事典』(1982)では、「動作が向けられる対象や目標を表す」(p395)と説明され、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998)では、「『そのものごとに向けて／応じて』などの意味を表し、後ろにはそれに向けられた行為や態度など、なんらかの働きかけを示す表現が続く」(p443)と説明されている。

このように、中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」は、付属する名詞(N)に前接するか後接するか(“对”N)と「Nに対して」が違うだけで、意味上かなり対応していると思われる。

しかし、一方では、以下の例のようにうまく対応しないものもある。

- (1) a “人对洞口呼喊，回声隆隆，仿佛听到了千里之外的回声。”

「洞の口にむかって(×に対して) 叫ぶと、声が反響し遠くから聞こえるようだ。」

- b “‘妈呀！妈呀！’

床上の小孩子忽然哭着叫起来了。这声音使得曾家驹一跳。他慌慌张张举起手枪来对床上放射了。” (子夜・p117)

「母ちゃん！母ちゃん！

ベッドの子どもが急に泣き出す。その泣き声に、曾家駒はハッとする。あわてて拳銃をあげて、ベッドへ向けて(×に対して) ぶっ放す。」 (夜明け前・p82)

- c “李玉亭跟着吴荪甫的眼光也对那鹦鹉看了一眼，……” (子夜・p284)

「その目を追って、李玉亭も鹦鹉を(×に対して) 眺める。」

(夜明け前・p194)

- d “有根上前，对秋林灯笼踢一脚：‘谁叫你爹没钱’。”

「有根は前へ行って、秋林の提灯を蹴(×に対して) 蹴って、「おまえの親父は金がないのだから」(おまえが悪いのさ) と言った。」

- e “虎妞堵着爸爸耳根吹嘘，刘四爷对祥子笑了笑。”

(骆驼祥子 (原)・p326)

「ひのえ午嬢は親爺の耳に口を当てて、大ぼらを吹いた。劉四爺は祥子に向かって (×に対して)、笑ってみせただけだった。」

(骆驼祥子 (訳)・p196)

- f “他对那棵树笑了笑。”

「彼は、その木に向って (×に対して) 笑っていた。」

- g “并且，「联合国军」总司令麦克阿瑟率领他的高级官员和将领，于七月底对台湾进行访问。”

(黒雪 (原)・p4)

「なおかつ、「国連軍」総司令官マッカーサーは、高級幕僚や将校を引き連れ七月末に台湾を (×に対して) 訪問した。」

(黒雪 (訳)・p6)

- h “他吃惯了高粱米饭的肠胃，对这种充满霉味的白米进行着坚决的排斥。”

(红高粱家族・p21)

「高粱飯に慣れきっている胃袋は、そのかびくさい白米飯を (×に対して) まるで受けなかった。」

(赤い高粱・p30)

- i “对公司来说，希望把损失压缩到最小的程度。”

「会社としては (×にとって)、損失を少しでもカバーしたいです。」

- J “但今天我们是小部队，天险对我们却成了有利。” (林海雪原・p141)

「しかし今日はわれわれは小部隊、自然のけわしさはわれわれにとって (×に対して) かえって有利になる。」

(樹海と雪の原野に・p117)

「に対して」と“对”は、どの部分でうまく対応するのか、またどの部分で対応しないのかについて、今のところまだ明確に説明されていない。本論文では、“对”と「に対して」との対応関係を明確に示すと同時に、“对”と「に対して」との用法の異同について検討を加える。

2. 中国語介詞“对”と日本語複合格助詞「に対して」の用法の分類

2・1 “对”の用法の分類

中国語の介詞“对”の用法に関する研究はかなり進んでいる。代表的なものとしては、北京大学中文系(1982)、傅雨賢他(1997)、侯学超編(1998)などがあり、それらをまとめると、以下のようになる。

- A. “表示方向”「方向」を表す。
- B. “表示对象目标”「対象・目標」を表す。
- C. “表示对待关系”「対処関係」を表す。
- D. “表示涉及关系”「関連関係」を表す。

2・2 「に対して」の用法の分類

日本語の複合格助詞「に対して」の用法については、従来あまり論じられておらず、山下他(1994)が見られるくらいである。

山下他(1994)は、「に対して」の用法を文法機能から以下のように分類している³⁾。

- A. 格助詞「に」とほぼ同じ文法的機能を持つもの。
- B. 格助詞「に」に内在する文法的機能を明確に特定し、文自体のあいまいさを排除する機能を持つもの。
- C. 既存の格助詞ではまかないきれない格関係を表す機能を持つもの。

“对”と「に対して」について実際の用例を調査したところ、山下他(1994)が指摘した、格助詞「に」と互換できるタイプと他の格助詞と互換不可なタイプの他に、格助詞「を」と互換できるタイプも存在することが分かった。本論文では、「に対して」の用法を以下の3タイプに分類する。

A. 「を」と互換できるタイプ

- (2) 「このため浅井氏に対して (○を) 十分以上に懐柔しておかねばならなかった。」
(新潮・国盗り物語)

B. 「に」と互換できるタイプ

- (3) 「彼は私に対して (○に) 何も要求しなかった。」

C. 他の格助詞と互換不可なタイプ

- (4) 「美也子は卓一に対して (??に/??を) 自分の行為に苦しんでいる。」
(塗られた本・p227)

以下、“对”と「に対して」のそれぞれの用法がどのような構文で見られるのか分析しながら、両者の対応関係の実態を見ていく。

3. “对”の用法と、「に対して」の対応状況

3・1 「方向」を表す“对”と「に対して」

3・1・1 「方向」を表す“对”について

- (5) “后来见老四没聒他的经，又听到脚步声对房门口走来，他一个翻身，往床里一滚。”

「その後、老四が彼の話の聞かなかったのを見て、また足音がドアにむかって近づいてくるのが聞こえ、彼は寝返りを打ち、ベッドの奥へ転がった。」

「方向」を表す“对”については、傅雨賢他（1997）の他には、従来あまり論じられていない。

傅雨賢他（1997）は、「方向」を表す“对”について次のように説明し

ている。

“一般来说，‘对₁’（「方向」を表す“对”を指す）后面的宾语⁴总是由表示方位的名词，即方位词或词组充当，如‘台上、山上、脸上、下面、上面、外面、这边、窗外、这方面、那一方’等。

‘对₁’后面宾语也可是表示处所的名词，如‘洞口、里院、地面、正面、远处、房门口’等。

由‘对₁’结构构成的语句，其中的谓语动词通常是些表示具体动作的词语，如‘走来、泼来、发射、发功、砸过去、啐、开、伸、弹、抛、指、戳、拂、努嘴、看、望、招、喊’等；那些不表示具体动作的行为动词⁵，由于它们所表示的意义总是偏抽象，因而一般不出现在由‘对₁’构成的语句中。”（p177）「一般的に言えば、‘对₁’の後に付く賓語は、いつも方位を表す名詞、すなわち方位名詞または方位句より構成される。たとえば、「台の上、山、顔、下、上、外、こちら、窓の外、そちら」などである。

‘对₁’の後ろに付く賓語は場所を表す名詞であってもよい。たとえば、「洞の口、中庭、地面、正面、遠処、戸口」などである。

‘对₁’構造により構成される文では、述語動詞は通常具体的な動作を表す語句である。たとえば、「歩いて来る、ぶっ掛けて来る、発射する、功を発する、（重い物で物を）ぶつける、吐く、（銃砲を）放つ、伸ばす、はじく、投げる、指差す、突く、払う、口を突き出して知らせる、見る、眺める、手で招く、叫ぶ」などである。具体的な動作を表さない行為動詞は、それが表す意味がいつも抽象に偏っているので、通常‘对₁’構造により構成される文には現れない。」

以上をまとめると、「方向」を表す“对”文において、構文には以下のような特徴が見られる。

A. “对”の賓語、即ち“对”に後続する名詞は、方位名詞、場所名詞で構成される。たとえば、(5)は“房门口”（「戸口」）である。

B. 述語動詞は具体性を持つ動作動詞で構成される⁶。たとえば、(5)は“走来”（「歩いて）近づく」）である。

実際の用例を調査したところ、「方向」を表す“对”文においては、主語は人を表す語で構成されることも分かった。たとえば、(5)の“老四”(「老四」)のような人の呼び方を表す名詞などである。

また、“对”のこの用法は、同じく方向を表す中国語の介詞“向、往、朝”⁷⁾に比べると、用例が比較的少なく、また具体的な方向を表しているという特徴も見られる。

3・1・2 「に対して」と方向

3・1・1であげられた(5)の中国語の用例を日本語に翻訳すると、中国語の“对”に相当するところは「に対して」ではなく、「に向って」などの表現になる。(6)などでは、「に」や「へ」など、単独の格助詞が対応する場合があるが、もっともうまく対応するのは、方向を明示する「に向かって」である。

- (6) “后来见老四没听他的经，又听到脚步声对房门口走来，他一个翻身，往床里一滚。”

「その後、老四が彼の話を聞かなかったのを見て、また足音がドアにむかって (○の方へ/×に対して) 近づいてくるのが聞こえ、彼は寝返りを打ち、ベッドの奥へ転がった。」

また、次の(7)が示すように、主語が人を表す語で、述語は動作動詞、「に対して」に先行する名詞(構文的に“对”の賓語に相当するもの)は場所・方向名詞という、具体的な「方向」を表す中国語の“对”文の成立条件を満たしても、「に対して」では、文が成り立たないことがある。「に対して」ではなく、「に向って」などに代えれば、文は成り立つ⁸⁾。

- (7) 「悠子は、礼を言い、海にむかって (×に対して)、砂の斜面をおり始めた。」
(夜行列車殺人事件・p74)

それでは、「に対して」は「方向」を表すことができるのか。それについて、森田・松木（1989）は、次のように説明している。

「「に<へ>対しくて>」は、動作や感情が向けられる対象を指示する機能を果たす。動詞「対する」の“他のものに向かう、応じる”意を引き継ぐため、目標を示すといった方向性や、相対する人物・事物への反作用性などが示唆されることが多い。」（p9）

森田・松木（1989）は、「に対して」の「方向」は、「目標を示すといった方向性が示唆される」と指摘するに止まり、具体的に方向や場所を表す語が「に対して」に先行するか否か、または「に対して」が具体的な方向性を表すことができるか否かは説明されていない。

実際に用例調査してみると、「に対して」に先行する名詞のところ、具体的に方向または場所を表す名詞が現れた例には、以下の（8）のようなものがある。

- (8) a 「加藤が山の本を見に来たことは、八分どおり、彼を山の仲間に引きずり込むことのできる証拠だと考えていたのが、そうではなく、加藤が山にはたいした感激も示さず、本から外の景色へ眼をやったのは、未だに、加藤は山に対してさほどの関心を持っていない証拠に思われた。」（新潮・孤高の人）
- b 「山に対して戦いの観念を持っておしすすめた場合、結局は負ける方が人間であるように考えられた。」（新潮・孤高の人）
- c 「足の先、手の先、そういうところから、しみこんで来る寒さ、背中からおしつづすようにやってくる寒さ、敷いている、シートを通して、伝わってくるつめたさ、それらのすべての方向に対して、加藤は用心深く気を配っていった。」（新潮・孤高の人）
- d 「海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船に対して、いかに数では有利でも、トルコ船はそう簡単には攻撃をしかけてはこれなかった。」（新潮・コンスタンティノーブルの陥落）

- e 「それまでピストンのヘッドの形状はあまり考えられなかったが、ピストンのヘッドの形状を、燃料の噴射方向に対してある傾斜を持たせたらどうであろうか。」 (新潮・孤高の人)
- f 「相当歩いてふりかえって見ると、彼のシュプールの跡は目標に対してかなり左の方へ曲っていた。」 (新潮・孤高の人)
- g 「医者^は、笠岡の身体を乗せた撮影装置を水平や斜めに倒したり、また笠岡の体位を撮影台に対して横やおおむけにしてさまざまな角度から造影撮影を行った。」 (青春の証明・p85)

(8) では、「山、方向、船、噴射方向、目標、撮影台」などのような、具体的に方向または場所を表す名詞が「に対して」に先行しているが、述語動詞は、「関心を持つ、推し進める、気を配る」などのような、抽象的な動作を表す動詞や、「攻撃を仕掛ける」などのような、具体的な動作を表すものの、具体的に移動する意味をそれほど強く示さない動詞、さらには、「傾斜を持たせる、曲がっている、横やおおむけにする」などのような、ある状態(にすること)を表す動詞である。(8) で、「に対して」に先行し、具体的に方向または場所を表すと考えた「山、方向、船、目標」などの名詞は、具体的な方向や場所ではなく、(8) a や、(8) b、(8) c では「対象」、(8) d では抽象的な「対象+方向性」、(8) e や、(8) f、(8) g では、動かぬ目標を表すと考えられる。

また、(9) が示すように、

- (9) 「だが、十津川は、妙子に対して、一度も男のことを、聞きただしたことはなかった。」 (イブが死んだ夜・p71)

「に対して」は、「相手+方向性」のような意味を表している。この場合、「に対して」に先行する名詞は、人を表す語で、述語動詞は言語活動に関する動詞と動作動詞で構成されている。

以上まとめてみると、

- A. 「に対して」に先行する名詞が具体的に方向または場所を表す語であっても、具体的に移動する意味を表す述語動詞が現れない。
- B. 述語動詞が具体的に移動する意味を表す語であっても、「に対して」に先行する名詞には具体的に方向または場所を表す語が現れない。
「に対して」は、(8) d のように、抽象的な「対象＋方向性」を表すことや (9) が示すように、「相手＋方向性」のような意味を表すことはあっても、中国語の“对”のように、具体的な「方向」を表すことは出来ず、両者は対応しないと結論づけることができる。

3・2 「対象・目標」・「対処関係」を表す“对”と「に対して」

3・2・1 「対象・目標」を表す“对”について

3・2・1・1 「対象・目標」を表す“对”の賓語と述語動詞との意味関係

「対象・目標」を表す“对”の賓語と述語動詞との意味関係について、呂叔湘編（1980）、北京大学中文系（1982）、傅雨賢他（1997）、侯学超編（1998）などをまとめると、以下のように分類できる。

- A. “对”の賓語が意味上述語動詞の対象であるもの。
 - a. “对”の賓語を述語動詞の後に復元可能なタイプ。
 - b. 述語動詞に「方向補語」を伴わせて復元不可なタイプ。
- B. “对”の賓語が意味上述語動詞の対象ではないもの。
- C. “对”の賓語が意味上述語動詞の対象ではなく、述語動詞の目的語の対象であるもの。

以下、それぞれのものについて検討を加えていく。

- A. “对”の賓語が意味上述語動詞の対象であるもの。
これには、二つのタイプがあるとされる。
 - a. “对”の賓語を述語動詞の後に復元可能なタイプ。

(10) と言えば、述語動詞は“看”（「見る」）で、“对”の賓語は“那个铅笔盒”（「その筆箱」）である。“对那个铅笔盒看了一眼”（「その筆箱をちらりと見た」）を“看了那个铅笔盒一眼”（「その筆箱をちらりと見た」）というふうにおきかえることができる。

- (10) a “他对那个铅笔盒看了一眼。”
「彼はその筆箱をちらりと見た。」
a’ “他看了那个铅笔盒一眼。”
「同上」

なお先行研究では指摘がないが、このタイプの“对”文を成立させるのには、述語動詞が具体性を持つ動詞であるという条件のほか、述語動詞に「動量補語」⁹⁾（“一眼”「ちらりと見る」など）をつけないと、このタイプの文は成立しない。

- (11) a* “他对那个铅笔盒看了，……”
a’ “他看了那个铅笔盒，……”
a” “他对那个铅笔盒看了一眼。” (= (10) a)

b. 述語動詞に「方向補語」¹⁰⁾を伴い、復元不可なタイプ。

(12) と言えば、述語動詞は“看”（「見る」）で、“对”の賓語は“陆根兴”（「陸根興」）である。述語動詞に「方向補語」「去」を伴った場合、“对陆根兴看去”（「陸根興を見た」）を“*看去陆根兴”というふうにおきかえることができない。

- (12) a “张炳生脸上发热了，下意识对陆根兴看去。”
「張炳生は顔を赤くして無意識に陸根興を見た。」
a’ * “张炳生脸上发热了，下意识看去陆根兴。”

B. “对”の賓語は意味上述語動詞の対象ではないもの。

(13) a で言えば、述語動詞は“笑了笑”（「笑った」）で、“对”の賓語は“大家”（「みんな」）である。“对大家笑了笑”（「みんなにむかって笑った」）を“*笑了笑大家”というふうにおきかえることができない。

(13) a “水生对大家笑了笑。”

「水生はみんなにむかって笑った。」

a' * “水生笑了笑大家。”

b “可是他刚走到酒馆门前，突然又想起自己已经对焦昆下了保证，又犹豫了，马上停止了脚步。”（沸腾の群山・p419）

「だが、ちょうど門の前まで来たとき、自分が焦昆に¹¹⁾誓った約束を思い出し、ためらい、すぐ足を止めた。」

（沸き立つ群山・p467）

b' * “可是他刚走到酒馆门前，突然又想起自己已经下了保证焦昆，又犹豫了，马上停止了脚步。”

C. “对”の賓語は意味上述語動詞の対象ではないが、(14) が示すように、“对”の賓語“山上的敌人”（「山の上にいる敵」）は意味上述語動詞の目的語“进攻”（「攻撃する」）の対象である。

(14) a “司令员一直准备对山上的敌人发动进攻。”

「司令官はずっと山の上にいる敵に対して攻撃に出ようとしている。」

a' “司令员一直准备进攻山上的敌人。”

「司令官はずっと山の上にいる敵を攻撃しようとしている。」

3・2・1・2 「対象・目標」を表す“对”の構文的特徴について

「対象・目標」を表す“对”の構文について、傅雨賢他（1997）は、次

のように説明している。

“主语多是表示人物的名词性词语¹²⁾，事物名词作这种语句主语的情况较为少见。…（中略）…‘对₂’（「対象・目標」を表す“对”を指す）的宾语，总的来说，既可以是表人物的名词性词语或机关、团体、单位名称，也可以是表事物的名词性词语。…（中略）…“对₂”构造所修饰的谓语动词，以表具体动作的动词为常见。动作意义不太具体的行为动词，有时也可出现在这类语句中。…（中略）…意义抽象的形式动词、存在动词¹³⁾，能出现于由“对₂”构成的语句中，仅限于几个常用词，如‘有、作、展开、施以、施加、进行’等。这类动词后面总是带有动词宾语。”（p180～p181）「主語は主として人間を表す名詞の性質を持つ言葉がなり、事物名詞がこのタイプの文の主語になる場合は比較的少ない。…“对₂”の賓語についてまとめて言えば、人間を表す名詞の性質を持つ言葉、または機関、団体、单位名称がなる場合もあるし、事物を表す名詞の性質を持つ言葉がなる場合もある。…“对₂”構造が修飾する述語動詞は、主として具体的な動作を表す動詞である。動作を余り具体的に表さない行為動詞がこのタイプの文に現れる時もある。…抽象意義を表す形式動詞、存在動詞が“对₂”で構成された文に現れるのは、よく使用されている、極わずかな種類のもので、たとえば、「ある」「する」「展開する」「かける」「進める」等である。このタイプの動詞はいつも動名詞の目的語を伴う。」

傅雨賢他（1997）では、「対象・目標」を表す“对”の構文において、述語動詞の種類の詳細については説明されていないが、「対象・目標」を表す“对”の賓語と述語動詞との意味関係において、次のような事項が指摘できる。

A. 「“对”の賓語が意味上述語動詞の対象である」タイプの述語動詞は、全て具体的な動作を表す動詞である。抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞、存在動詞は使用されない。

B. 「“对”の賓語が意味上述語動詞の対象ではない」タイプの述語動詞には、具体的な動作を表す動詞と抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式

動詞などが含まれている。

C. 「“対”の賓語が意味上述語動詞の対象ではないが、“対”の賓語が意味上述語動詞の目的語の対象である」タイプの述語動詞は、全て抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞である。具体的な動作を表す動詞は使用されない。

3・2・1・3 「方向」を表す“対”と「対象・目標」を表す“対”との違い

「方向」を表す“対”と、「対象・目標」を表す“対”との違いについて、傳雨賢他（1997）は、次のように説明している。

“対₂”（「対象・目標」を表す“対”）和“対₁”（「方向」を表す“対”）是两个不同的介词，这种不同主要表现在介词宾语上面。“対₁”只能与带有方位性质的词语组合，“対₂”则只能与表示人、物的名词性词语结合。”（p179）「“対₂”と“対₁”は二つ違った介詞で、その違いは主として介詞賓語にある。“対₁”は方向・位置の性質を持つ語しか従えず、“対₂”は人間・事物を表す名詞しか従えない。」

しかし、“対”に後接する賓語が方向・位置の性質を持たなくても、次の（15）のように“対”が「方向」を表す場合もある。

（15） a “対田中看去。”

「田中さんを（×に対して）見る。」

a' “看田中。”

「同上」

a" * “対田中看。”

（15）では、“対”に後接する賓語の“田中”（「田中」）は、（15）a' が示すように、意味上それぞれ“看”（「見る」）の述語動詞の対象であり、方向・位置の性質を持っていない。また、（15）a"（* “対田中看”）が示すように、「方向補語」の「去」をつけないと、“対”文は成り立ちにくい。

言い換えれば、(15)では、「方向補語」の「去」をつけると、文が成り立つのみならず、“对”は述語動詞が働きかける「対象」を示すと同時に、働きかける「方向」をも示している。さらに言えば、“对”が「方向」を表すための条件は、“对”に後接する賓語が方向・位置の性質を持つか否かのみならず、述語動詞が「方向性」を持つ（「方向補語」の“去”をつけられる）か否かもその条件の一つのようである。この点についても、先行研究では明確に記述されていない。

このような「方向補語」の“去”をつけられるタイプの動詞は、先に挙げた“看”の他、“打”（「殴る」）“抽”（「打つ」）“砍”（「切る」）“踢”（「蹴る」）“咬”（「噛む」）“刺”（「突き刺す」）“顶”（「突く」）“敲”（「叩く」）“劈”（「切る」）“骂”（「罵る」）“摸”（「なでる」）などがある。

一方、日本語の場合、対応する諸動詞は、「を」を使って働きかける対象を表すだけで、方向を示さないのが普通のものである。

3・2・2 「対処関係」を表す“对”について

この「対処関係」について、傅雨賢他（1997）は次のように説明している。

“对待关系一般只存在于有意志的主体与某一对象之间，主体可以把某种性状、行为等加于某一对象之上。”（p184）「対処関係は、通常、意志の有る主体と、ある対象の間にしか存在せず、主体はある性状、行為等を、ある対象に加えることが出来る。」

3・2・2・1 「対処関係」を表す“对”文の述語

この「対処関係」を表す“对”文の述語は、大きく分けると形容詞述語と動詞述語の2種類があるとする。

A. 形容詞述語の場合

この場合、主として人と人または人と事物の間の「対処関係」を表すと

され、主語は人称名詞、“对”の賓語は人称名詞、事物名詞で、時に動詞句で構成される場合もあるという。述語形容詞は、人間の性情または品性を表すものが多く、たとえば、“好”（「よい」）“不错”（「素晴らしい」）“严格”（「厳しい」）“亲热”（「熱心だ」）“冷淡”（「冷たい」）“直爽”（「率直だ」）“大方”（「気前がよい」）“忠诚”（「忠実だ」）“谦虚”（「謙虚だ」）“谨慎”（「慎重だ」）“负责”（「責任感がある」）“粗鲁”（「荒っぽい」）“大意”（「いいかげんだ」）“随便”（「気ままだ」）“和气”（「穏やかだ」）“客气”（「礼儀正しい」）“傲慢”（「傲慢だ」）“凶残”（「残酷だ」）“马马虎虎”（「ぞんざいだ」）“一丝不苟”（「まじめだ」）“态度好”（「態度がよい」）“感情深”（「感情が深い」）などの例が挙げられている。

(16) “现在形势变了，任务变了，对新事物要敏感，……”

（沸騰的群山・p262）

「いまや、形勢がかわり、任務もかわりました。新しい事物に対して敏感でなければなりません。」
（沸き立つ群山・p292）

B. 動詞述語の場合

この場合、主語は通常人称名詞、事物名詞、述語は行為動詞が一番よく使用され、形式動詞、存在動詞、判断動詞¹⁴⁾が使用される場合もあるが、動作動詞は使用されないとされる。“对”の賓語は人間・事物を表す言葉が一番多く、動詞句、文で構成される場合もあるという。

(17) a “老头子对儿子的处境自然十分担心（行為動詞）。”

「お爺さんは、息子の立場に対して、当然非常に心配している。」

b “本文对‘有’字用法作（形式動詞）一番全面概括。”

「本文は「有」という字の用法を全面的に概括してみる。」

c “妈妈的话对我也很有（存在動詞）启发。”

「母の話は、私に対しても大いにヒントを与えた。」

中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」

- d “船队的群众对不宣传龙根（“对”の賓語が動詞句で構成される例）
很有意见。”
「船隊の人々は、龍根を宣伝しないことに対して、かなり意見がある。」
- e “郑百如对这件事是（判断動詞）什么态度呀？”
「鄭百如はこの事に対して、どんな態度ですか。」
- f “他知道乔光朴对他出去（“对”の賓語が文で構成される例）并不抱信心。”
（锅碗瓢盆交响乐・p56）
「彼は、喬光朴が彼が出かけることに対して、自信を持っていないことが分かる。」
（鍋釜交響曲・p66）

3・2・2・2 「対処関係」を表す“对”の賓語と述語動詞との意味関係

先行研究の成果を元に「対処関係」を表す「对」と述語動詞との意味的な関係を整理すると、以下A～Dの四類に分けることができるだろう。

A. “对”の賓語が意味上述語動詞の対象であるタイプ。

(18) で言えば、述語動詞は“敌视”（「敵視する」）で、“对”の賓語は“他”（「彼」）である。“对他敌视”（「彼を敵視する」）を“敌视他”（「彼を敵視する」）のように、直接、述語の対象となる文におきかえることができるもの。

(18) a “三等的中国学生觉得他也是学生而摆阔坐二等，对他有点敌视。”

「三等車（に乗る）の中国学生は、彼も学生なのに大尽風をふかして二等車に乗るなんてと思って、彼をちょっと敵視している。」

a’ “三等的中国学生觉得他也是学生而摆阔坐二等，有点敌视他。”

「同上」

B. “对”の賓語が意味上述語動詞の対象ではないタイプ。

(19) と言えば、述語動詞は“取”（「採る」）で、“对”の賓語は“白崇禧及西南各敌”（「白崇禧及び西南地方の諸敵」）である。“对白崇禧及西南各敌取…之方针”は、“取…之方针白崇禧及西南各敌”のように、直接、述語の対象となる文にはおきかえることができないもの。

(19) a “我对白崇禧及西南各敌均取大迂回动作，插至敌后，先完成包围，然后再回打之方针。”（毛泽东传（原）・p924）

「白崇禧及び西南地方の諸敵に対しては、いずれも大規模な迂回の行動を取って、敵の後方まで突っ込んで、まず包围を完成させてから、叩くという方針を採る。」（毛沢東伝（訳）・p871）

a’ * “我均取大迂回动作，插至敌后，先完成包围，然后再回打之方针白崇禧及西南各敌。”

C. “对”の賓語は意味上述語動詞の対象ではないが、“对”の賓語は意味上述語動詞の目的語の対象であるタイプ。

(20) と言えば、述語動詞は“做”（「する」）で、述語動詞の目的語は“准备”（「準備」）で、“对”の賓語は“仁川の防务”（「仁川の防衛」）である。“对仁川の防务未曾做到应有的准备”（「仁川の防衛に対してはまだ準備していない」）の“仁川の防务”を直接述語の対象とする文に置き換えらることはできないが、“未准备仁川の防务”（「仁川の防衛をまだ準備していない」）のように、述語の目的語の対象とする文にはおきかえることができるもの。

(20) a “他们对仁川の防务未曾做到应有的准备。”（黒雪（原）・p23）

「彼らは仁川の防衛に対してはまだ準備していません。」

（黒雪（訳）・p34）

中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」

a' “他们未准备仁川的防务。”

「彼らは仁川の防衛をまだ準備していないはずです。」

D. “对”の賓語は意味上述語動詞の対象ではないが、意味上述語動詞で構成された動賓（動詞・目的語）構造において、目的語の定語（連体修飾語）となる、動名詞の対象であるタイプ。

(21) で言えば、述語動詞は“作”（「する」）で、述語動詞の目的語は“工作”（「作業」）で、述語動詞の目的語の連体修飾語は“争取”（「獲得（する）」）で、“对”の賓語は“国民党剩余军队”（「国民党の残存部隊」）である。“对国民党剩余军队作争取工作”（「国民党の残存部隊に対して獲得活動を行った」）は、“争取国民党剩余军队”（「国民党の残存部隊を獲得する」）というようにおきかえることができるもの。

(21) a “此外，毛泽东通过已站到人民方面来的国民党军政要员对国民党剩余军队作争取工作。”（毛泽东传（原）・p924）

「この他、毛沢東はすでに人民の側に立っている国民党の軍・政府要員を通して、国民党の残存部隊に対する獲得活動を行った。」

（毛沢東伝（訳）・p874）

a' “此外，毛泽东通过已站到人民方面来的国民党军政要员争取国民党剩余军队。”

「この他、毛沢東はすでに人民の側に立っている国民党の軍・政府要員を通して、国民党の残存部隊を獲得した。」

3・2・3 「対象・目標」を表す“对”と「対処関係」を表す“对”との違い

さて、「対象・目標」を表す“对”と「対処関係」を表す“对”とは、どのように違うのだろうか。先行研究を元にその相違点を整理すると次の3点にまとめることができる。

A. 「対象・目標」を表す場合は、述語動詞は主として動作動詞で、行為動詞、形式動詞、存在動詞が使用される場合もある。これに対し、「対処関係」を表す場合は、述語は、主として行為動詞と形容詞（性情または品性を表すものが多い）である。形式動詞、存在動詞、判断動詞が使用される場合もあるが、動作動詞は使用されない。

ここで示した「行為動詞」「形式動詞」「存在動詞」などの中国語の動詞の分類について、簡単に整理しておこう。

まず、「行為動詞」であるが、傅雨賢他（1997）は、これを“不表示具体动作，所表示的意义总是偏抽象。”（p177）「具体的な動作を表さず、示している意義はいつも抽象に偏っている。」と説明している。代表的なのは、“满意”（「満足する」）“佩服”（「敬服する」）“尊重”（「尊重する」）“同情”（「同情する」）“了解”（「了解する」）“熟悉”（「熟知する」）“喜欢”（「好む」）“关心”（「関心を持つ」）“讨厌”（「嫌う」）“怀疑”（「疑う」）“懊悔”（「後悔する」）“遵守”（「遵守する」）“照看”（「世話する」）“要求”（「要求する」）“教育”（「教育する」）“管理”（「管理する」）“在乎”（「問題にする」）などである。

「形式動詞」について、李臨定（1990）は、“形式动词是指本身不具有实在意义而只能以动词名词化形式为宾语的动词。形式动词主要有三个：‘进行、加以、作’”（p105）「形式動詞とは、それ自身が実際の意義を持たず、動名詞しか目的語とできないような動詞を指す。該当する動詞は主として「進める、かける、する」の三つがある。」と説明している。

「存在動詞」について、黄国荣他（1983）は、“表示存在、变化、消失的：在、存在、发生、有、演变、发展、生长、死亡、消失。”（p315）「存在、変化、消失の意味を表し、たとえば：「ある、存在する、発生する、持つ、進展変化する、発展する、生長する、死亡する、消失する」などである。」と説明している。

「判断動詞」について、黄国荣他（1983）は、“表示判断的（判断动词）：是。”（p315）「判断の意味を表している‘是’である。」と説明している。

張静他(1982)は“判断动词除了‘是’外,还包括‘叫、算、等于、叫作、象’等,为数不多。这类动词主要是联系主语和宾语,表示它们同属一类,一般不能直接重叠,不能缀加‘了、着、过’。”(p104)「判断動詞には、“是”を除き、「…という、…とする、…と同じである、…と呼ばれる、似せる」などが含まれ、数はそれほど多くない。この種類の動詞は主として主語と目的語を結びつけ、それらが同じ種類に属することを示す。一般的には直接重ねることが出来ず、“了、着、过”¹⁵⁾をつけることが出来ない。」と説明している。

B. 「対象・目標」を表す“对”は、介詞“向”と交替でき介詞“对于”とは交替できない。

(22) a “他对我笑笑。”

「彼は私にむかって笑った。」

a' “他向(×对于)我笑笑。”

「同上」

C. 「対処関係」を表す“对”は、一般的に介詞“对于”とは交替できるが、介詞“向”とは交替できない。

(23) a “斯大林对我们党是有些瞧不起。” (黒雪(原)・p64)

「スターリンはわが党を過小評価しています。」(黒雪(訳)・p43)

a' “斯大林对于(×向)我们党是有些瞧不起。”

「同上」

先行研究では、「対象・目標」を表す“对”の述語動詞は主として動作動詞で、行為動詞、形式動詞、存在動詞が使用される場合もあるとされ、「対処関係」を表す“对”の述語動詞は、主として行為動詞で、形式動詞、

存在動詞、判断動詞が使用されると、説明されてきたが、「対象・目標」を表す“対”に使用される行為動詞、形式動詞、存在動詞と、「対処関係」を表す“対”に使用される行為動詞、形式動詞、存在動詞とがどのような関連性を持つのかについては、明確にされていないようである。

この点について、本論文筆者は、次のように考えている。「対象・目標」を表す“対”の述語動詞になれるものは、介詞“向”と交替可能な、“报复”（「報復する」）、“倾注”（「傾ける」）、“发动”（「働きかける」）、“进行”（「する」）などのような一部の行為動詞と形式動詞である。以下のような特徴を持っている。

A. 抽象的な方向性を示すことができる。

B. “対”の賓語は通常人間の性質を持つ。

存在動詞については、本論文筆者が用例調査を実施した過程では「対象・目標」を表す“対”の述語動詞になった例は見つからなかった。

3・2・4 「に対して」と、「対象・目標」・「対処関係」

これまで論じたように、「に対して」は「対象・目標」を表す“対”と、「対処関係」を表す“対”の両方に対応している。但し、「対象・目標」を表す“対”の場合は、非動作動詞が後続した際しか対応しない。

3・2・4・1 「に対して」に先行する名詞と述語動詞との意味関係

「に対して」に先行する名詞と述語動詞との関係は、意味上三つのタイプがある。

A. 「に対して」に先行する名詞が意味上述語動詞の対象であるタイプ。

(24) で言えば、述語動詞は「尊重する」で、「に対して」に先行する名詞は「彼の主張」である。「かれの主張に対して尊重しない」を「かれの主張を尊重しない」というふうにおきかえることができるもの。

(24) a 「態度もぶえんりよで、ことに、かれの主張に対しては、尊重しない…」
(沸き立つ群山・p400)

a' 「態度もぶえんりよで、ことに、かれの主張を尊重しない…」

B. 「に対して」に先行する名詞が意味上述語動詞の対象ではないタイプ。

(25) で言えば、述語動詞は「恥じる」で、「に対して」に先行する名詞は「犬神家の家名」である。「犬神家の家名に対しても、捕虜になることを恥じる」を「*犬神家の家名を捕虜になることを恥じる」というふうにおきかえることができないもの。

(25) a 「犬神家の家名に対しても、私は捕虜になることを恥じたのです。」

(犬神家の家族・p405)

a' * 「犬神家の家名をも、私は捕虜になることを恥じたのです。」

C. 「に対して」に先行する名詞は意味上述語動詞の対象ではないが、述語動詞の目的語の対象であるタイプ。

(26) で言えば、述語動詞は「しかける」で、述語動詞の目的語は「攻撃」で、「に対して」に先行する名詞は「海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船」である。「海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船に対して、いかに数では有利でも、トルコ船はそう簡単には攻撃をしかけてはこなかった」を直接「しかける」の対象とすることはできないが、「攻撃」という事柄名詞の対象として、「いかに数では有利でも、トルコ船は海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船を攻撃してこなかった」というふうにおきかえることができるもの。

(26) a 「海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船に対して、いかに数では有利でも、トルコ船はそう簡単には攻撃をしかけてはこなかった。」
(新潮・コンスタンティノーブルの陥落)

- a' 「いかに数では有利でも、トルコ船は海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船を攻撃をしてこなかった。」

3・2・4・2 「に対して」の述語

「に対して」文の述語には、形容詞述語と動詞述語と名詞述語の 3 種類がある。

A. 形容詞述語の場合

実際の用例調査によれば、「に対して」文の述語になる形容詞は、以下示すように、「鋭敏だ、穏やかだ、面白い、懐疑的だ、寛大だ、厳しい、厳格だ、公平だ、残酷だ、小心だ、親切だ、誠実だ、従順だ、自信满满だ、心配だ、鄭重だ、冷たい、強い、情け深い、破壊的だ、恥ずかしい、批判的だ、敏感だ、不機嫌だ、不賛成だ、不満だ、盲目だ、やさしい、有効だ、用心深い、よそよそしい、冷酷だ、冷淡だ、悪い」などがある。

いずれも、主として人または事物に対する、主語である人称名詞の、態度・反応を表す形容詞である点が注目される。

- (27) a 「現在の妻、梅子に対してすら、かれの目つきは穏やかではなかったのだ。」 (犬神家の家族・p72)
- b 「鳥たちは雨ふりに対してとても敏感なの。」 (新潮・世界の終わり)
- c 「私は内心嬢の意見や教授法に対しては甚だ不満でしたけれども、」 (新潮・痴人の愛)

B. 動詞述語の場合

この場合、主語には通常人称名詞、事物名詞が用いられ、述語には、行為動詞¹⁶⁾が一番よく使用され、存在動詞、形式動詞¹⁷⁾が使用される場合もある。動作動詞はめったに使用されないものの、言語活動や思考活動を

中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」

表す動詞が使用されることがある。「に対して」に先行する名詞は人間・事物を表す語が一番多く、また動詞句、文で構成される場合もある。

- (28) a 「私も、別にエディが悪いわけではないとわかっていながら、喫茶店できちんと話しておいてくれなかったことに対して、少し腹を立てていた（行為動詞の例）。」（新潮・一瞬の夏）
- b 「ただ陸軍の連中とか自分のライバルに対しては、今で言うドライなところ、ちっと残酷なところが山本さんにはあった（存在動詞の例）ようだ。」（新潮・山本五十六）
- c 「夫に対してべつだん不足はなかった（存在動詞の例）し、かれも私に満足してくれている。」（Cの悲劇・p194）
- d 「また、特定の問題を自分と異なる方面から考えている人に対しては自然に攻撃的になる（形式動詞の例）ことが多い、時にはそれが高じて憎悪に変わることもさへある。」（新潮・若き数学者のアメリカ）

C. 名詞述語の場合

本論文で言う「名詞述語」は、「名詞+ダ」の形式を指す。(29) b で言えば、「脅威+でない」になる。

- (29) a 「じつは彼女はぼくに対して冷感症なのです。」（新潮・聖少女）
- b 「米国の五の勢力が、日本の三の勢力に対して脅威でないというなら、日本の五の勢力が、米国の五の勢力に対して脅威になるはずが無いではないか。」（新潮・山本五十六）

以上まとめると、「に対して」は、中国語“对”との比較で言えば、「対象・目標」を表す中国語の“对”の一部と、「対処関係」を表す中国語の“对”とに対応している。日本語の場合は、中国語のように「対象・目標」

と、「対処関係」との二用法に分けられる根拠を本論文筆者はまだ見出せないで、それについては今後の課題としたい。

3・3 「関連関係」を表す“対”と「に対して」

「関連関係」について、先行研究を紹介しておこう。

呂叔湘編（1980）では、“对…来说。表示从某人、某事的角度来看。有时候也说‘对…说来。’”（p157）「“对…来说”は、ある人、ある事の角度から見ることを表す。“对…说来”を使用する場合もある」と説明されている。

傅雨賢他（1997）では“（涉及关系）就是指站在某一角度看问题时所涉及到的一定的事和物。…（中略）…‘对’引进的是某种论断、看法等所牵涉到的某个特定对象。”（p192）「（関連関係は）ある立場に立って問題を観察する際、関連する一定の事と物を指す。…（中略）…“对”が導入したのは、ある論断、見方等が関連するある特定対象である。」と説明されている。

3・3・1 「関連関係」を表す“対”の構文特徴

本論文筆者の観察によれば、「関連関係」を表す“対”文において、主語は事物を表す語が多く、また動詞句、文が主語になる場合もある。述語は存在、判断など抽象的な意味を表す動詞または事物の性質を評価する形容詞が多く、特に“对……来说”という形がよく使用されている。

(30) a “国家建设这个课题对我们来说是生疏的，但是可以学会的。”

（毛泽东传（原）・p910）

「国家建設という課題はわれわれにとって未体験のものではあるが、学び取ることができる。」（毛沢東伝（訳）・p856）

* 「国家建設という課題はわれわれに対して未体験のものではあるが、学び取ることができる。」

中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」

- b “就算你把地球打穿了，把地球炸毁了，对于（对）太阳系来说，还算是一件大事情，但是对整个宇宙来说，也算不了什么。”

（黒雪（原）・p228）

「たとえ、そちらが地球に穴を開け、地球を爆破したとしても、そのことは太陽系にとっては大事件ではあるが、宇宙全体にとってははなにほどのことでもありません。」（黒雪（訳）・p359）

- * 「たとえ、そちらが地球に穴を開け、地球を爆破したとしても、そのことは太陽系に対しては大事件ではあるが、宇宙全体に対してはなにほどのことでもありません。」

3・3・2 「に対して」と「関連関係」

(30) が示すように、主語が示す結論、人物、概念などが、特定の対象に関連し、その特定の立場から観察する場合、日本語は通常「にとって」の形でその特定の対象を示す。従って、「その立場からみれば」という意味を表す場合、文の主語は、主として事物を表す言葉であり、動詞句や文が主語になる場合もある。そして、後続する述部には、主に評価を表す表現がくる。

この点からすると、通常人称名詞を主語とする「に対して」は、主語の態度を表明するので、“对”が表す「関連関係」には対応しないといえる。

- (31) a 「私はその案に対して、反対する。」
b* 「その案は、私にとって反対する。」
c 「その案は、私にとって名案である。」
d* 「その案は、私に対して名案である。」

3・3・3 “对于（对）……（来说）”と文の主体

3・3・3・1 問題の所在

「関連関係」を表す“对”と文の実質的な主体との関連について、先行研究では以下のように説明されている。

張寿康（1978）では、“〔对于（对）……来说〕这种复合介词结构，有引入并强调主动者的意义。试比较：

1. 我〔对他〕是十分熟悉的。（‘对’引进‘对象’）
2. 我〔对他来说〕是十分熟悉的。（我，成为意念中的‘对象’，而由〔对……来说〕引进的‘他’，成了主动者。）

例 2 可以转换成：‘他〔对我〕是十分熟悉的。’再看：

3. 社会主义经济，〔对于我们来说〕，还有许多未被认识的必然王国。

例 3 中的‘我们’是主动者，‘社会主义经济’是意念中的‘对象’。”（p241）
「“对于（对）……来说”のような複合介詞構造は、主体を導入し且つ強調する場合がある。（用例略）例 3 における“我们”は主体で、“社会主义经济”は意味上の対象である」と説明されている。

華萍（1981）では、

“*这里的一切对我这个刚刚跨进校门的大学生当然感到十分新鲜。

这里的一切对我这个刚刚跨进校门的大学生来说当然感到十分新鲜。
‘对某某人’这样的格式，表示‘某某人’是意念中的对象；‘对某某人来说’这样的格式，表示‘某某人’是意念中的主动者。”（p105）
「（用例略）“对某某人”のような形は、“某某人”が意味上の対象であることを示しており、“对某某人来说”のような形は、“某某人”が意味上の主体であることを示している」と説明されている。

張寿康（1978）と華萍（1981）に対して、徐浩良・徐钜（1981）は、

“*这里的一切对我这个刚刚跨进校门的大学生当然感到十分新鲜。

这里的一切对我这个刚刚跨进校门的大学生来说当然感到十分新鲜。”
（華萍（1981）の用例）について、

“我们认为，后一句也是有毛病的。因为在‘N₁+对于+N₂（+来说）+

W’の句式で、NとWは構成表述関係の。那么、‘这里的一切’是不会‘感到十分新鲜’的，只有‘我这个……大学生’才会‘感到’什么。显然，这个句子的结构是错误的，应删去‘感到’。”(p9)「われわれは、二番目の文も非文であると考えている。それは、“N₁+对于+N₂(+来说)+W(述部)”構造において、NとWが説明関係を構成するからである。従って、“这里的一切感到十分新鲜”が成り立たず、“我这个……大学生感到……”しか成り立たない。従って、言うまでもなく、この文の構造が間違っており、“感到”を削除すべきである。」

…中略…

さらに“社会主义经济,(对于我们来说),还有许多未被认识的必然王国。”(張寿康(1978)の用例)について、

“‘我们’是主动者，‘社会主义经济’是意念中的‘对象’。‘我们’与‘社会主义经济’通过‘认识’这个中介，可以构成主动者与对象的关系，但本句语意并非如此。本句逻辑语义是：‘社会主义经济(所有者)一有一(未被我们认识的)必然王国(对象)。”

可见，‘对于……来说’引进的不一定是主动者。”(p9)「“我们”と“社会主义经济”が“认识”という仲介を通じて、主体と対象との関係を構成することが出来るが、この文の意味はそうでもない。この文のロジックの意味は、“社会主义经济(所有者)が(未被我们认识的)必然王国(対象)を有する”ということである。従って、“对于……来说”が導入したのは、必ずしも主体とは限らない」と説明している。

以上まとめると、徐浩良・徐钜(1981)は、

a. 張寿康(1978)と華萍(1981)が挙げた用例に不適切さがある。

b. “对于……来说”が導入したのは、必ずしも主体とは限らない。

と指摘しているものの、

(32)のような用例について、挙げるにとどまり、“对于(对)……(来说)”が文の実質的な主体を示す場合があるか否かについては明確に説明していない。

- (32) a “对于无产阶级艺术家，这些情绪应不应该破坏呢？我以为是应该的……”
- b “对于一个指挥员来说，起初会指挥小兵团，后来又会指挥大兵团，这对于他是进步了，发展了。”

北京大学中文系（1982）では、“但有些句子，‘对于’的宾语非但不受后面动词的支配，而且意念上还是这个动词的施事，去掉‘对于’，它就成了全句的主语。例如：

⑦对于中国共产党，在帝国主义没有武装进攻的时候，或者是和资产阶级一道，进行反对军阀（帝国主义的走狗）的国内战争，例如一九二四至一九二七的广东战争和北伐战争，或者是联合农民和城市小资产阶级，进行反对地主阶级和买办资产阶级军阀（同样是帝国主义的走狗）的国内战争，例如一九二七至一九三六的土地革命战争。”（p168）「一部の文では、“对于”の賓語は後続動詞の対象でないのみならず、意味上後続動詞の主体となる。“对于”を削除すると、それが文の主語となる（用例略）」と説明されている。

以上まとめると、先行研究は、“对于（对）……（来说）”が文の実質的な主体を示す場合があることを指摘しているものの、以下の現象については説明していない。

- a. (33) が示すように、(33) a における“会”を削除すると、“对于（对）……（来说）”で文の実質的な主体を示す文は成立しなくなる。
- b. (33) c が示すように、“对于（对）……（来说）”を使用しないと、“会”を削除しても、文は成立する。

言い換えれば、先行研究では“对于（对）……（来说）”で文の実質的な主体を示す場合があることを指摘するにとどまっており、その成立条件を含む具体的な考察はほとんどなされていない。

- (33) a “对于一个指挥员来说，起初会指挥小兵团，后来又会指挥大兵团。”
b* “对于一个指挥员来说，起初指挥小兵团，后来又指挥大兵团。”
c “一个指挥员，起初指挥小兵团，后来又指挥大兵团。”

3・3・3・2 “对于（对）……（来说）”と文の実質的な主体との関連

- (34) a “对于一个指挥员来说，起初会指挥小兵团，后来又会指挥大兵团。”
「戦闘指揮官は（×にとって）、最初は小部隊を指揮することが出来、後は大部隊を指揮することも出来るようになる。」
a’ * “对于一个指挥员来说，起初指挥小兵团，后来又指挥大兵团。”
a” “一个指挥员，起初指挥小兵团，后来又指挥大兵团。”
b “对他来说，无论多么困难也得走过去。”
「彼としては（×にとって）、何とか（向こうまで）行かなければならない。」
b’ * “对他来说，无论多么困难也走过去。”
b” “他走过去。”
c “对于公司来说，希望把损失压缩到最小的程度。”
「会社としては（×にとって）、損失を少しでもカバーしたいです。」
c’ * “对于公司来说，把损失压缩到最小的程度。”
c” “公司把损失压缩到最小的程度。”

(34) から、“对于（对）……（来说）”と文の実質的な主体との関連について、以下の現象を観察することが出来る。

- A. “对于（对）……（来说）”¹⁸⁾ は文の実質的な主体を示す場合、補助条件が必要である。例えば、(34) a’、(34) b’、(34) c’ が示すように、(34) a、(34) b、(34) cにおける「能力、義務、希望」などの意味を表す“会”、“得”、“希望”を削除すると、文は成立しなくなる。
- B. (34) a、(34) b、(34) c の和訳が示すように、このタイプの“对

于(对)……(来说)”を日本語に翻訳した際、「にとって」ではなく、「としては」などに翻訳されるのが普通のものである。

よって、本論文では次のような結論を下す。文の実質的な主体を示す“对于(对)……(来说)”は、「関連関係」を表す“对”とは若干異なる。一つは、“对于(对)……(来说)”は文の実質的な主体を示す場合に、上記の補助条件を必要とする。もう一つは、このタイプの“对于(对)……(来说)”は、「にとって」ではなく、通常「としては」などに対応する。

4. 「に対して」の用法分類と“对”

2・2において、本論文筆者は「に対して」の下位分類について、A. 「を」と互換できるタイプ、B. 「に」と互換できるタイプ、C. 他の格助詞と互換不可なタイプ、の3つに分類した。この三つのタイプの「に対して」には、ほぼ“对”が対応すると見なすことができる。

4・1 「を」と互換できるタイプの「に対して」の述語動詞について

用例調査では、このタイプの述語動詞には、「援助する」「嫌がる」「遠慮する」「思う」「解釈する」「懐柔する」「感謝する」「勘違いする」「空襲する」「警戒する」「嫌悪する」「嫉妬する」「渋る」「心配する」「準備する」「信用する」「説得する」「調査する」「同情する」「とりなす」「批判する」「放任する」「容赦する」「喜ぶ」「評価する」「知る」などの動詞が使用されている。

(35) a 「彼らは帰国、休養調整の命令に対しては、むしろ嫌がっている。」

(黒雪・p356)

b 「矢須子が重松夫妻に対して遠慮しすぎたことにある。」

(新潮・黒い雨)

c 「加藤が、横須賀の出張に対して、やや渋ったのは宮村健のこと

だった。」 (新潮・孤高の人)

d 「この関川は、そのライバル意識から、心ひそかに和賀に対して不快に思っていたのですが、」 (砂器・p434)

e 「その両方に対しては、私はいっさい知らないのであります。」 (棲息分布・p312)

「に対して」が直接動詞の対象となるもの以外に、動詞が名詞化¹⁹⁾して、述語動詞の目的語として現れ意味上「に対して」に先行する名詞が動詞と対象との関係を構成する場合もある。たとえば、(36) a では「勘違い」は「する」の目的語であるが、意味上、「に対して」に先行する名詞（「顔に痣とか傷のある人の心理」）は、「顔に痣とか傷のある人の心理を勘違いする」のように「勘違いする」という動詞の対象となっている。(36) b では「警戒」は「する」の目的語であるが、意味上、「に対して」に先行する名詞（「誰」）は、「警戒する」という動詞の対象となっている。

(36) a 「そこで僕はわかったのですが、顔に痣とか傷のある人の心理に対して、僕は随分今まで勘違いをしていた、ということです。」 (新潮・太郎物語)

b 「だいいち私はいったい誰に対して警戒をすればいいのだ？ 記号士か、それとも『組織』か、それともあのナイフの二人組か？ 三つのグループを相手にまわしてうまく立ちまわることなんて、とてもではないが今の私の手にあまる。」 (新潮・世界の終わり)

4・2 「に」と互換できるタイプの「に対して」について

(37) a “誰对美下得了手？” (土門（原）・p207)

a' 「美しいものに手を掛ける度胸のある人間はいないじゃないか。」 (土門（訳）・p36)

- b “成义却对我们药房提出一整套要求。” (土門 (原)・p342)
- b’ 「ところが成義は、わたしたち薬坊に対して一連の要求を出してきた。」 (土門 (訳)・p249)
- c “游刚有个毛病，一向对女人都比较客气，……”
(锅碗瓢盆交响乐・p218)
- c’ 「游刚はもともと女性に弱い。女性に対していつも手加減をするし、…」
(鍋釜交響曲・p158)

(37) が示すように、中国語の“对”を日本語に翻訳する際、「に」((37) a と (37) a’) で訳するのがふさわしいものと、「に対して」((37) b、(37) b’ と (37) c、(37) c’) で訳するのがふさわしいものがある。どんな場合に「に」になり、どんな場合に「に対して」になるかについては、おおよそ以下のような傾向が見られる²⁰⁾。

A. (37) b’ のように、「抗議する・請求する・反抗する・反発する・抵抗する・要求する」など相手と対立的な関係にある意味合いを持つ動詞が後続する場合、「に対して」が多く使用される。

B. (37) c’ のように、文が明らかに対比的な意味を示す場合、「に対して」が多く使用される。

4・3 他の格助詞と互換不可なタイプの「に対して」について

このタイプについて、山下他 (1994) では、(38) a、(38) b などの用例を挙げ、「既存の格助詞ではまかないきれない格関係を表す機能を「に対して」が果たしている。」(p22) と説明されている。

- (38) a 「そういう個人的な問題に対して、会社としてそこまでケアするのは妥当ではない。」
- b 「職務上の失敗に対しては当然ペナルティを覚悟しなければならない。」

また、塚本（1991）では、(39) a、(39) bの用例を出し、「ドイツ軍に対して」は「抵抗する」にとっては「必須補語」なのに対し、「姉さんに対して」は「惜しむ」にとっては「副次補語」である（p85）と説明されている。

(39) a 「フランス軍はドイツ軍に対して抵抗した。」

b 「叔父さんは姉さんに対して賛美を惜しまなかった。」

このような他の格助詞と互換不可な「に対して」について、本論文筆者は、以下のように考えている。

A. (40) が示すように、述語動詞そのものが目標を要求する働きはないが、目標を示す必要がある場合は、「に対して」が使用される。例えば、(40) a の「和む」、(40) b の「取り戻す」、(40) c の「得る」は、もともと目標を要求しないが、「に対して」により、目標を明確に示すことが出来るようになる。

(40) a 「呪詛と憎悪の間にも、たまゆらの凧のようにふと心が夫に対して和むことがある。」
(青春の証明・p65)

b 「田ノ倉五平はこうして相模に対しては従来の威厳と権限を取り戻すことができたが、併し高男に対してはどのようなものか頭が上がらなかった。」
(射程・p253)

c 「セメント工場を経営したいと思ったそもそもの動機は、三石多津子に対して、自分が多少でも人前に出られる社会的地位を得たいだけのことであった。」
(射程・p310)

B. (41) が示すように、述語動詞は、通常具体的な場所を目標として要求するが、その目標を人間性名詞または抽象的な事項として示す必要がある場合は、「に対して」が使用される。例えば、(41) a の「飛ばす」、(41)

b の「出る」は、通常具体的な場所を表す目標を「に」格として要求するが、その目標を人間性名詞でもって示す必要がある場合は、「に対して」が使用される。(41) c の「渡す」、(41) d の「積み上げる」は、通常具体的な場所や人物を目標として示すが、「に対して」により抽象的な事項を目標として示している。

(41) a 「しかし、物量と科学の粋でよろった米機動部隊にたいして誇大な大和魂だけで武装しての紙飛行機を飛ばすような特攻に疑惑を持たざるを得なくなった。」 (青春の証明・p130)

b 「辻に対しては、改めて出なおしてくるつもりで。」

(C の悲劇・p164)

c 「堀川といえば、根元は彼の念入りの調査に対して改めて三万円を渡した。」 (棲息分布・p251)

d 「結婚以来、夫に対して憎悪しか積み上げてこなかった妻が、最近急激に変化してきた。」 (青春の証明・p94)

C. (42) が示すように、述語動詞が形式動詞か、または「名詞+ダ」の形式になった場合は、目標を表すために、「に対して」がよく使用される。

(42) a 「鏡子はこの頃高男に対してひどく臆病になり、この若い愛人を自分の手許にとどめておくことに汲々としていた。」 (射程・p274)

b 「業界に対しても俄かに彼の土建会社は注目の的になる。」

(棲息分布・p231)

c 「初子は、山根に対して半分パトロンのような気持ちでいて、今までも彼の欲しいものはもとより、自分から何かと買って与えた。」

(棲息分布・p199)

d 「青沼禎二郎は女に対してなかなかのベテランのようだった。」

(塗られた本・p109)

4・4 「N+数量詞+に対して」と「…のに対して」について

グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998)では、(43)と(44)の例を挙げ、(43)について、「数量で表された数を単位として、「その単位に応じて」の意を表す。「…について」「…につき」に言い換えられる。」(p443)と、(44)について、「対比的なふたつのことがらを並べて示すのに用いる。」(p443)と、それぞれ説明されている。このタイプの「に対して」は、意味上、上述した「に対して」と若干異なり、またそれに対応する中国語が“对”ではなく、(45)と(46)が示すように、(43)では“每”、(44)では“与…相对”になるので、本論文では、これ以上触れないことにする。

(43) a 「研究員一人に対して年間 40 万円の補助金が与えられる。」

b 「学生 20 人に対して教員一人が配置されている。」

c 「砂 3 に対して 1 の割合で土を混ぜます。」

d 「学生一人に対して 20 平米のスペースが確保されている。」

(44) a 「彼が自民党を支持しているのに対して、彼女は共産党を支援している。」

b 「兄が背が高いのに対して、弟の方はクラスで一番低い。」

(45) 「学生 20 人に対して教員一人が配置されている。」

“每 20 名学生配备一名教师。”

* “对 20 名学生配备一名教师。”

(46) 「彼が自民党を支持しているのに対して、彼女は共産党を支援している。」

“与他支持自民党相对，她支持共产党。”

* “对他支持自民党，她支持共产党。”

5. まとめ

以上、本論文では、“対”と「に対して」について先行研究を検討し、用例調査を行った上で、主として四つの内容を論じた。それらをまとめると、以下ようになる。

5・1 中国語の介詞“対”の用法分類

- A. “表示方向”（「方向」を表す）。
- B. “表示対象目標”（「対象・目標」を表す）。
- C. “表示对待关系”（「対処関係」を表す）。
- D. “表示涉及关系”（「関連関係」を表す）。

本論文では、“対”について、以下のような問題点を指摘し、検討を加えた。

まず、“対”が「方向」を表す場合に、その条件は、“対”の従う賓語が方向・位置の性質を持つか否かのみならず、述語動詞が「方向性」を持つ（「方向補語」の“去”をつけられる）か否かもその条件の一つになる。

次に、「対象・目標」を表す“対”の賓語と述語動詞との意味関係について、“対”の賓語は意味上述語動詞の対象であり、そして“対”の賓語を述語動詞の後に復元可能なタイプの場合、このタイプの“対”文を成立させるのには、述語動詞が具体性を持つ動詞であるという条件のほか、述語動詞に「動量補語」をつけないと、このタイプの文は成立しない。

第三、「対象・目標」を表す“対”の賓語と述語動詞との意味関係において、

- A. 「“対”の賓語が意味上述語動詞の対象である」タイプの述語動詞は、全て具体的な動作を表す動詞である。抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞、存在動詞は使用されない。

B. 「“对”の賓語が意味上述語動詞の対象ではない」タイプの述語動詞には、具体的な動作を表す動詞と抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞などが含まれている。

C. 「“对”の賓語が意味上述語動詞の対象ではないが、“对”の賓語が意味上述語動詞の目的語の対象である」タイプの述語動詞は、全て抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞である。具体的な動作を表す動詞は使用されない。

第四、先行研究では、「対象・目標」を表す“对”の述語動詞は主として動作動詞で、行為動詞、形式動詞、存在動詞が使用される場合もあるとされ、「対処関係」を表す“对”の述語動詞は、主として行為動詞で、形式動詞、存在動詞、判断動詞が使用されると、説明されてきたが、「対象・目標」を表す“对”に使用される行為動詞、形式動詞、存在動詞と、「対処関係」を表す“对”に使用される行為動詞、形式動詞、存在動詞とがどのような関連性を持つのかについては、明確にされていないようである。この点について、本論文筆者は、次のように指摘している。「対象・目標」を表す“对”の述語動詞になれるものは、介詞“向”と交替可能な一部の行為動詞と形式動詞である。以下のような特徴を持っている。

A. 抽象的な方向性を示すことが出来る。

B. “对”の賓語は通常人間の性質を持つ。

存在動詞については、本論文筆者が用例調査を実施した過程では「対象・目標」を表す“对”の述語動詞になった例は見つからなかった。

5・2 日本語の複合格助詞「に対して」文の構文について、本論文筆者が行った用例調査を通じて、以下の内容を論じた。

まず、「に対して」文の述語になる形容詞について、主として人または事物に対する、主語である人称名詞の、態度・反応を表明する形容詞で構成されている。

次に、「に対して」文において、主語には通常人称名詞、事物名詞が用

いられ、述語には、行為動詞が一番よく使用され、存在動詞、形式動詞が使用される場合もある。動作動詞はめったに使用されないものの、言語活動や思考活動を表す動詞が使用されることがある。「に対して」に先行する名詞は人間・事物を表す語が一番多く、また動詞句、文で構成される場合もある。

第三、「に対して」に先行する名詞が具体的に方向または場所を表す語であっても、具体的に移動する意味を表す述語動詞が現れない。述語動詞が具体的に移動する意味を表す語であっても、「に対して」に先行する名詞には具体的に方向または場所を表す語が現れない。「に対して」は、抽象的な「対象+方向性」を表すことや「相手+方向性」のような意味を表すことはあっても、中国語の“对”のように、具体的な「方向」を表すことは出来ず、両者は対応しないと結論づけることができる。

5・3 日本語の複合格助詞「に対して」の用法分類について、本論文筆者は、A. 「を」と互換できるタイプ、B. 「に」と互換できるタイプ、C. 他の格助詞と互換不可なタイプ、の3つに分類した。

まず、「を」と互換できるタイプについては、具体的に互換可能な動詞を調査した。

次に、「に」と互換できるタイプについては、相手と対立的な関係にある意味合いを持つ動詞が後続する場合、また文が明らかに対比的な意味を示す場合、「に対して」が多く使用されることを指摘した。

第三、他の格助詞と互換不可なタイプについては、その具体的な条件を以下のようにまとめた。

- a. 述語動詞そのものが目標を要求する働きはないが、目標を示す必要がある場合は、「に対して」が使用される。
- b. 述語動詞は、通常具体的な場所を目標として要求するが、その目標を人間性名詞または抽象的な事項として示す必要がある場合には、「に対して」が使用される。

- c. 述語動詞が形式動詞か、または「名詞+ダ」の形式になった場合は、目標を表すために、「に対して」がよく使用される。

5・4 中国語の介詞“对”と、日本語の複合格助詞「に対して」との対応関係²¹⁾について、以下のように整理した。

A. 中国語の介詞“对”のカバーする範囲は広く、日本語の複合格助詞「に対して」のみならず、「にむかって」、「にとって」などにも対応している。ここで注意に値するのは、文の実質的な主体を示す“对于(对)……(来说)”が「にとって」ではなく、通常「としては」などに対応することである。

B. 日本語の複合格助詞「に対して」のカバーする範囲は比較的狭く、具体的には

- a. 「対処関係」の“对”とに対応している。
- b. 「対象・目標」を表す“对”の中の「述語動詞が非動作動詞」である場合、それに対応する。
- c. 「方向」を表す“对”と、「関連関係」を表す“对”とには対応しない。
- d. 「対象・目標」を表す“对”の中の「述語動詞が動作動詞」である場合、及び“对于(对)……(来说)”が文の実質的な主体を示す場合、それらに対応しない。

注

- 1) “对”に対し、類義した機能・意味を持つ“对于”という形式もある。本論文が“对于”ではなく、“对”を扱うのは、“凡用‘对于’的地方，都可以用‘对’。”(劉月華他・1983・p175)「およそ“对于”が使われているところはすべて“对”を使うことが出来る」からである。また、“对”と“对于”との違いについては、本論文では触れないことにする。
- 2) 本論文で言う「に対して」には、次のようなひらがな表記を使用する「にたいして」も含まれる。

「さすがにそれらの事実にたいして批判がましいことはいわなかった。」

(迷路荘の惨劇・p190)

“所以无法对这些事情作任何评论。”(名琅庄・p119)

また、次のような、割合文語的なニュアンスを示す「～に対し」について、本論文では触れないことにする。

「刺激に対し感応性がある」(森田・松木(1989))。

- 3) 詳しくは、山下他(1994)を参照されたい。
- 4) 介詞の賓語について、趙淑華(1996)では“介詞后面主要带名词、代词或名词性词语作它的宾语，……”(p406)「介詞の後には、主として名詞、代名詞または名詞の性質を持つ語が付き、それらを介詞の賓語とする。」と説明されている。
- 5) 行為動詞について、3・2・3節で説明する。
- 6) 「方向」を表す“对”に関する傅雨賢他(1997)にある問題点について、3・2・1・3節「方向」を表す“对”と、「対象・目標」を表す“对”との違いのところで説明する。
- 7) “向、往、朝”を日本語に翻訳すると、“向”は「…に向かって」、 “往”は「…に向かって、…の方へ」、 “朝”は「(…の方に) に向かって」となる。
- 8) (6) が示すように、日本語の「にむかって」は方向を表す中国語の“对”に対応する時はあるが、次の例文が示すように、対応しない時もある。本論文筆者が実施した用例調査によれば、日本語の「にむかって」は、方向を表す“对”より、むしろ、“朝、向”に対応した方が多いようである。これは、“对”と“朝、向”との分布にかかわりがあるので、本論文ではこれ以上論じないことにする。
「信介は六年生をおいて、骨富士の斜面にむかって (×に対して) 駆け出した。」
(青春の門・p98)
“信介撇下那个六年级生，跃身朝(？对)骨富士的山坡奔去。”(青春之门・p112)
- 9) 「動量補語」について、李曉琪他(1996)では“‘数词+次/趟/回’放在动词后面补充说明动作的次数，叫作动量补语。”「数詞+次/趟/回」を、動詞の後に置き動作の回数を補充説明し、動量補語と称する。」(p57)と説明されている。
- 10) 「方向補語」について、朱德熙(1982)では“由趋向动词‘来、去、进、出、上、下、回、过、起、开’等充任的补语叫趋向补语。”「方向動詞「来る、行く、入る、出る、上がる、下がる、帰る、過ぎる、起きる、開く」などがなる補語を方向補語と称する。」(p128)と説明されている。
- 11) 中国語の“对”は、日本語の格助詞「ニ」に翻訳される場合もある。それについて、4・2節で説明する。
- 12) 傅雨賢他(1997)では、“人称名词指的是表人的名词、代词及机关、团体、单位名称。”「人称名詞は人を表す名詞、代名詞及び機關、団体、單位の名称を指す」(p195)と説明されている。
- 13) 形式動詞、存在動詞について、詳しくは3・2・3節で論じる。
- 14) 判断動詞について、3・2・3節で説明する。
- 15) 中国語では、“了”は動詞・形容詞の後ろに置き、動作・行為の完了や状態の

中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」

変化などを表す。“着”はアスペクトを表す助詞で動詞・形容詞のすぐ後につき、「(1) …している。(2) …ている、…てある。(3) (…に) …ている、…てある」などの意を表す。“过”は「…したことがある」などの意味を表す。

- 16) 本論文で言う「行為動詞」とは、具体的な動作を表さない非動作動詞を指す。
- 17) 本論文で言う「存在動詞」とは、「ある」を指す。本論文で言う「形式動詞」とは、(28) dの「なる」のようなものを指す。
- 18) 本論文筆者が用例調査した結果によれば、“对于……来说”、“对……来说”、“对于……”とも、文の実質的な主体を示す時もあるが、その違いについて、本論文では触れないことにする。
- 19) 「勘違いする」と「警戒する」をそれぞれ「勘違い」と「する」、「警戒」と「する」とに分析できる。「勘違い」と「警戒」は「動名詞」と呼ばれる部分に属する。
- 20) A. については、森田・松木(1989)、山下他(1994)も同様のことを指摘しており、B. については、山下他(1994)も同様のことを指摘している。
- 21) 張麟声(2001)日中両国語の誤用例を分析した際、日本語の「に対して」は、方向を表す中国語の“对”及び「関連関係」を表す“对”に対応しないと指摘したものの、中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」について、全面的に論じておらず、“对”と「に対して」との対応関係についても、「対象・目標」を表す“对”の中の「述語動詞が動作動詞」である場合、「に対して」と“对”、及び文の実質的な主体を示す“对于(对)……(来说)”と「にとって」それぞれ対応しないことを説明していない。

参考文献

- 北京大学中文系 1955 级、1957 级语言班编 (1982)《现代汉语虚词例释》，商务印书馆
- 傅雨贤、周小兵、李炜、范干良、江志如 (1997)《现代汉语介词研究》，中山大学出版社
- 侯学超编 (1998)《现代汉语虚词词典》，北京大学出版社
- 华萍 (1981) 评“暂拟汉语教学语法系统”，《中国语文》第 2 期
- 黄国荣等 (1983)《实用现代汉语语法》，甘肃人民出版社
- 李临定 (1990)《现代汉语动词》，中国社会科学出版社
- 李晓琪等 (1996)《新汉语教程 I II III》，北京大学出版社
- 刘月华、潘文娉等 (1983)《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社
- 吕叔湘主编 (1980)《现代汉语八百词》，商务印书馆
- 徐浩良、陈炯 (1981) 关于“对于……来说”，《中国语文通讯》第 6 期
- 张静等 (1982)《新编现代汉语》，上海教育出版社
- 张寿康 (1978) 说“结构”，《中国语文》第 4 期
- 赵淑华 (1996) 介词和介词分类，《词类问题考察》北京语言学院出版社

- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》，商务印书馆
- グループ・ジャマシイ編 (1998)：『日本語文型辞典』くろしお出版
- 張麟声 (2001)：『日本語教育のための誤用分析 中国語話者の母語干渉 20 例』スリー
エーネットワーク
- 塚本秀樹 (1991)：「日本語における複合格助詞について」『日本語学』3 月号 明治
書院
- 日本語教育学会編 (1982)：『日本語教育事典』大修館書店
- 森田良行・松木正恵 (1989)：『日本語表現文型』アルク株式会社
- 馬小兵 (2002a)：「日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞“关于” —そ
の対応関係を中心に—」『日本語と日本文学』34 号 筑波大学国語国文学会
- 馬小兵 (2002b)：「中国語の介詞“作为”と日本語の複合格助詞「として」 —「資
格・立場」を表す“作为”と「として」を中心に—」『日中言語対照研究論集』
第 4 号 日中言語対照研究会
- 馬小兵 (2002c)：「中国語の“対+N₁+的+N₂”と日本語の「N₁に対するN₂」に
ついて」『文教大学文学部紀要』第 16-1 号
- 馬小兵 (2002d)：『日本語の複合格助詞と中国語の介詞の対照研究』—「が」格・「を」
格と置換可能な複合格助詞を中心に—筑波大学博士 (言語学) 学位請求論文
- 山下明昭・山内博之・島田麻美 (1994)：「に對しての文法機能」『国語と教育』18
号 大阪教育大学

用例資料

『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』(発行:新潮社/発売:NEC インターチャネル)

所収の、日本人作家による 67 作品全て (詳細は略)

《骆驼祥子》	1936	老舍	《老舍小说集》	长江文艺出版社
『骆驼祥子』和訳	1991	中山高志		白帝社
《黑雪》	1985	叶雨蒙		济南出版社
『黒雪』和訳	1987	朱建栄・山崎一子		同文館
《毛泽东传》	1996	金冲及主编		中央文献出版社
『毛沢東伝』和訳	2000	村田忠禧他		みすず書房

(本学非常勤講師)